

ナジブ氏が第6代首相に就任 (2009.4.3)

ナジブ政権発足についての一般的所感

荒川朋子

先日発足したナジブ政権の顔ぶれを眺めると、内政に関しては、経済問題にベテランを、国内諸問題には新顔を積極的に配置することによって、新旧ほど良いバランスを感じさせる。外交に関しては、マレーシア建国以来の伝統ともいえる「全方位外交」の展開が予測されるし、インドネシア、タイ、フィリピンなどの近隣諸国には、「安定したマレーシア」を印象づけるのに成功している。また、欧米に対しても、アジア、とりわけ中国に対しても、細やかな対応ができそうな気配りが伺える。

ナジブ首相自身は、前任のアブドラ・バダウィ首相、マハティール首相とは異なる系統の、いわゆる伝統型エスタブリッシュメントであり、有数の文化人・経済人等を輩出し、英国内でも高い評価を得ているノッティンガム大学経済学部を卒業している。政権のスタートラインにおいて、彼の通商その他に関する実績が懸念されるとはいえ、ユーロ圏が成立した欧州内においても独自のポジションを維持している英国で学び、その補佐としてアジア通貨危機を乗り切った経験のある閣僚を置いたことは、ASEAN内におけるマレーシアのポジションを大きく損なうことはないであろうという安心感を、そして、WAWASAN21 を目指してまい進してきたマレーシアが今最も必要としている、21 世紀の第二建国期「国父」としての確かなイメージを、国民に与えることに成功した。アジア通貨危機以来、その広がり社会問題化した格差社会の出現という国内の不安感は、マレーシアが注視する中国を始めとした世界経済の悪化とともに、若年層の顕著なUMNO離れを促しているようだが、現実には政策運営を担う政権トップ層にしてみれば、求心力を失っているUMNOの建て直しには、彼を置いて他はないというのが現状であろう。マレーシア経済の緩やかな上昇局面に、追い風としての役割が期待されており、バランス一型の典型といえようか。

日本にとって、ナジブ政権の誕生は、良好な両国関係の維持につながるとして極めて好意的に受け止められた。ラザク政権以降のNEPの基盤とマハティール政権で促進されたルックイースト政策を背反することなく存在させるナジブ氏の政治家像には、日本の政財界にとって

良きノスタルジアとしてのイメージが浸透しており、これを契機としてか、企業のマレーシア進出も多く取りざたされている。観光面でも両国の一層の緊密化が図られる動きがあるが、問題は、マレーシア企業の日本進出にはそれに見合う動きが特にみられないことである。日本へのマレーシア人留学生数は、アジアでは中国・韓国に次ぐが、それらの優秀な学生の多くは、留学費用を清算するため、日本の企業に入ることが多いのは、20 年前と変わらないらしい。マレーシアでは、最近ドーナツショップの海外第一号店が出たそうである。それが日本でなかったことは、自然といえば自然なのであるが、ちょっと残念に思われるのは私だけであろうか。■